

Title	欧米に於ける支那古鏡(梅原末治著, 刀江書院刊)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.138- 140
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

心が大和朝廷のために吸収包含されたことを説いてゐる。いづれも弘く他民族、殊に南方太平洋民族の傳説との比較から、各物語の原始的意義を探り、さうしてそれらが季節祭の祭儀と密接の關係あることを明かにしたのであつて、いたるところ教授の創見をうかがうことができ、從來日本神話に於いて疑問とされた點の解明されたところが甚だ多い。

もとより本書は日本神話のあらゆる問題を論じつくしたものでなければ、またその論ぜられた範圍内に於いても、若干の希望がないでもない。例へば季節祭そのものに就いてもつと考證してもらひたい希望が起り、また研究方法に於いても、特に多くの異傳のある場合、一應本文批判が必要ではなからうかなどいふかすかな疑念を湧く。しかしこれらは吾等の單なる希望や印象にすぎないのであつて、もちろん本書の價値に何等關係あるものではない。教授は夙に柳田國男先生の學問の影響をうけ、更に在佛四年間フランス社會學派の下に研究せられ、既に在佛中、日本の言語、神話に關する二著述を公にして、世界の學界に知られたる新進學者であり、本書はまさに教授にとつて歸朝後第一の成果として記念すべきものであるばかりでなく、わが學界にとつてもまた大なる收穫であり、その新鮮にして該博なる知識は、斯界の視野を著しく擴大し、深めるであらう。(松本芳夫)

寛政三博士の學勳 (内田周平述)

本書は孔子祭典における内田周平先生の講演であつて、朱文公

生誕八百年記念として、文公の靈にきゞげられたものである。

松平定信が前代田沼の弊政を改めて幕政を緊肅せんがために種々の改革をしたが、その中學問の獎勵は殊に注意すべきものであつて、所謂寛政の三博士、即ち柴里栗山、岡田寒水、尾藤二洲を登庸して學制改革をした。本書はまづ寛政の學制改革と題して、三博士が朱子學の硬派たる崎門の學、その軟派たる林家の學、及びその硬軟二派の間に位する木門の學の、『或はその一に屬し、或はその二を兼ね、能く三派の長處を調和して、之を實用に施し、以て當時の學弊を救済した』ことより筆を起し、當時の學界の弊害を叙して儒者が文人に墮落したこと、従つてその改革の必要であつたことから、三博士起用の顛末、及び學政改革、即ち異學の禁の大略をのべ、ついで三博士の師友關係と題して、三博士の學問人物を完成せしめたるその師、及び三博士を補佐してその改革を遂行せしめたるその學友についてのべ、もつて三博士の學統を明かにし、最後に世にあまり知られざる三博士の逸話を紹介して、いづれも名利に走らず、節義を重じたる人物であつたことをのべ、古の學者と今の學者とを比較論評して後者に大なる戒を與へられた。僅か四十七頁の小冊子ではあるが、要をつくしてよく三博士の學勳を明にされ、日本の儒學史、或は教育史の一節としても誠に重き文獻である。(松本芳夫)

歐米に於ける支那古鏡 (梅原末治著 刀江書院刊)

本書は、梅原末治氏の三年四ヶ月に亙る歐米留學及び再度の入

露の收獲である。支那古鏡鑑研究の權威者である氏が、歐米の諸博物館、個人の收藏家を歴訪され、孜々として倦む所なく蒐集せられたる資料の一部は、美麗なる圖版により本書の中に蒐録せられ、氏の周到なる考説と相待つて、讀者は、居ながらにして歐米に散在する支那古鏡鑑の概要を辨へ得る。氏の學界に對する大なる寄與に向つて滿腔の謝意を披瀝せねばならぬ。

まづ遺品の豊富なるアメリカの蒐集品より遂次英佛白獨瑞露等のコレクションについて語り、その大部分が出土地を明白にせざるため、學術資料として價値劣るもその一部には、發見地の明かなるため鏡の年代考定に役立つものありとブツカン博士の鄭州附近出土鏡、ボストン博物館所藏の蕪湖の塹墓發見鏡鑑について論じ、ついで漢鏡の仿製鏡が南露、西伯利亞等に發見せられ、漢代文化の西漸が惹起したる一波紋が、後に小白銅鏡となつて東歐乃至中歐まで系統を引くことを述べてをる。

次に所謂秦鏡なるもの、性質を詳論し、その前漢鏡に先立つ一群たることを論斷し、前漢鏡盛行以前より戰國に遡る時期が、是等の類の行はれた實年代であると想定し、支那鏡としては最も古き形式であり、かつ「簡粗な鏡背に於ける其形の圖と文様との布置の方なる行き方との並存は、その以前に於ける別々な二者の存在を考へしめる點を持つ。即ち、これから其の圖文の示す古銅器文の外に、別に紐のみの圓い素文鏡のあつたことを想定せしめ」と論じ、この素文鏡が、全く別系統のものであり、スキタイ銅鏡の影響に基くといふ古い説が新たに考量せられると述べてをる。

次に大形の三角縁鏡、象嵌ある鐵製鏡、鍍金を施した鏡、方鏡等、比較的珍しき資料の「鏡鑑の上に現はれた技巧に對する吾々の知見を豊富にし、またそれから導かれる事實が一般鏡鑑沿革の考察の上に若干の寄與をなす」ものについて語り、つゞいて所謂隋鏡の彼地に存する優秀品について考察し、また歐米に多き複製鏡を通じ、複製古鏡なるもの、性質を究め、その起源唐に遡り、宋に盛行せしことを論じてをる。

次の「歐米に於ける唐鏡に就いて」と題する一文は、本誌九卷四號にかゝげられし「亞米利加で觀た唐鏡の三四に就いて」を更に擴大せられしもの、その中パレスチナで發見され、君府の博物館に藏せられる正倉院御物と同様式の唐鏡は、小亞發見の宋金鏡と共に中世に於ける東西文化交渉史の上に極めて興味ある一資料である。次に附録として既に發表されし「歐米で觀た佛像を表はした三面の古鏡」「歐米で觀た狩獵文鏡」「歐米に齎された日本出土の古鏡」の三編を附載し、終りに精美な圖版八十五葉を添附してある。

要するに本書は、歐米にもその比なき好著述にして、支那古學界の最高水準を示す出版物として斯界に志す士の是非座右に備ふべき良著である。本書を通じ吾人は、輓近とみに發達せる泰西支那古學の未だ遙かに我國の後にあることを知つて愉快に感ずる。然しながら學界の進歩日に日に止まざるを見るにつけ、吾人は、その優越權確歩のため、我考古學界の今後も劣らざる努力を期待して止まない。即ち進んで支那内地にまで發掘調査の手を伸べて、一々の鏡鑑の年代を確實に跡付けられ、古鏡研究の有終の

美を收められんことを衷心より希ふものである。(松本信廣)

元寇の新研究

(池内宏著
東洋文庫刊)

蒙古襲來が、たゞに我國史上の一大事件たるのみならず、精銳をもつて鳴る蒙古軍の連戦連勝の記録に印せられし僅少の敗戦の一つとしてかつまたマルコ・ポロの旅行記の中に最初の詳細な日本紹介の記事となつて表はれし點などよりして或意味に於て世界的意義ある事件と云はねばならぬ。此重要な出來事に對し、從來「伏敵篇」の如き資料集が現はれ、かつ國史方面に若干の興味ある論文が新資料の發見に伴うて公にせられたが、未だ是等の資料全體を纏めて元寇の役を充分科學的に考察した研究の現はれないのを遺憾としてゐた。此缺陷を満した池内博士の新著は、實に學界多年の翹望に添へるものであり、博士の努力に深く感謝しなければならぬ。

本書は、二卷よりなり、第一卷は、まづ蒙古の高麗征伐について語り、初め武力に訴へしものが、世祖に至り、懐柔的態度を取り、根本的に此の國を服屬せしめんとし、そのために日本を藩屬せしめんとし、欲望を起し、高麗に嚮導の義務を負はしめた経緯を明かにしてをる。世祖の日本征討が一に高麗の完全な服屬に淵源してゐたことは田中萃一郎教授のつとに説かれてゐた所であつたが今や鮮滿史の權威者たる池内博士の多年の蘊蓄を傾倒せられた明快な研究によつて久しき間の日本征討原因に關する疑問が雲散霧消したのは吾人の欣快とする所である。

ついで博士は、日本側の貴重なる資料である蒙古襲來繪詞を主として利用して文永・弘安の兩役を新たに解釋せられてをる。一體蒙古襲來繪詞の大矢野文は、或時代に於て紙の繼目がとけちり亂れたるを、綴り合せたもので、博士は、これを考定して新順位をたてられてゐる。氏によれば文永の役には敵の高麗軍は二十日朝龜原の海岸に上陸し、赤坂に迫り、他方蒙漢軍は、博多に上陸し、また一部は今津に上陸し、博多近邊で戦つた我が大兵は、戦ひ疲れて太宰府に退き、箱崎は、賊徒に蹂躪せられたが、賊徒は、その船中に引き上げ、夜中起つた颶風によつて兵船の大半覆没して退散した。弘安の役に於ては、東路軍は五月廿一日對島の佐賀(世界村)大明神浦(大明浦)を犯し、更に壹岐を襲ひ、六月六日に志賀島に迫り、八日間志賀島、能古島の附近に於て、水陸に日本軍と戦ひ、遂に退いて肥前の鷹島に據り、その一部は長門を襲ひて引き還へした。一方江南軍は、その先發軍が六月末對島、壹岐に來り、東路軍の一部と合して六月廿九日、七月二日の兩度逆撃した日本軍と壹岐に戦ひ、平戸に引き、その主力は、平戸(平壺島)に著し、先發軍及び東路軍と合し、鷹島(竹島、日本傳の五龍山)に移り、愈々太宰府を大舉襲はんとして閏七月一日の颶風に遇ひ、大半覆没した。我軍五日より七日に互り殘敵を襲ふて之を盡し戦役の幕を閉ぢたといふのが氏の大體の推考である。

最後に博士は、征東軍慘敗後の處置、至元十九年以後の征日本計畫を述べて本篇の終りとしてをる。

第二卷は、御物大矢野本蒙古襲來繪詞の縮寫複製であり、博士